



TITLE:

追悼文 前川嘉一先生の思い出

AUTHOR(S):

赤岡, 功

CITATION:

赤岡, 功. 追悼文 前川嘉一先生の思い出. 経済論叢 1990, 145(5-6): 124-125

ISSUE DATE:

1990-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/44737>

RIGHT:

經濟論叢

第145卷 第5・6号

哀 辞

故前川嘉一名誉教授遺影および略歴

アリストテレスの表券貨幣説(2)……………	本 山 美 彦	1
標準商品の考え方をマルクスの問題に 応用する可能性について(2)……………	岡 敏 弘	21
費用削減投資と参入阻止行動……………	林 田 修	35
N人非協力交渉ゲームについて……………	湯 本 祐 司	50
両大戦間期における地方有力銀行……………	東 憲 弘	67
顧客情報の集積・利用と経営戦略の再編……………	西 山 賢 一	97

追 憶 文

前川嘉一先生のお仕事と思い出……………	菊 池 光 造	120
前川嘉一先生の思い出……………	赤 岡 功	124

平成2年5・6月

京 都 大 学 経 済 学 會

前川嘉一先生の思い出

赤 岡 功

1965年、先生の研究室は、法経本館東の袖4階の西側にあった。毎週火曜日の2時半からの大学院のセミナーは、西日の照りつける中で、ロバートソン (D. J. Robertson, *Factory Wage Structures and National Agreement*, 1960) を読み、ターナー (H. A. Turner, *Trade Union Growth, Structure and Policy*, 1962; Turner, et al. *Labour Relation in the Mortor Industry*, 1967) を精読した。

研究室は2年ほどで旧北館の一室に移ったが、イギリスからはるばる運ばれたという赤煉瓦の建物は、梅雨時には濃くなった緑に鮮やかに映え、気分を引立てたし、中庭に南面する重厚な研究室は夏も涼しく、研究会の能率も一段と上がった。ショップ・スチュワード運動についての多くの資料にあたり、クレッグ、フランダーズ (A. Flanders and H. A. Clegg (eds.), *The System of Industrial Relations in Great Britain*, 1954; Flanders, *Management and Unions*, 1970) を読過し、ウェブを精読した。数年前、勤務地、高知で天逝した孤高の研究者石田傳氏とはずっと一緒であり、あと時に1人あるいは2人が参加していた。

1960年代後半というと、産業別労働組合による産業別交渉が欧米の労使関係の基本であるとそれまで考えられていたのが、企業レベルの交渉がかなり大きなウエイトを占めていることが知られはじめた頃であり、労働市場論を踏まえて労使関係が考察されるようになり、日本では労働経済学の揺籃期であった。いつも御多忙でもあり、一人一人それぞれについていつも細かく配慮される先生はしばしば疲れておられたが、当時の研究会は毎回知的興奮に満ちた熱気が溢れるものであったし、先生が長年にわたり取り寄せておられ、イギリスから定期的に届く、T&GWU (運輸一般労働組合) やA E U (機械工組合) 等々の機関誌を見せて戴くのも楽しみであった。

『イギリス労働組合主義の発展』(ミネルヴァ書房刊)で博士になられ、翌1969年教授になられたころの先生は、お元気で、万事に敏活であられ、初めての土地での合宿で

も旅行でも、その地の事情や交通にいつも驚くほど明るく、現地に到着するなり、まるで桑梓にもどられたかのように簡捷に行動されるのが常であったが、研究・教育においても若い我々よりも早く、時代の新しい課題を独自の観点をもって次々に示されることがしばしばであった。

その提案のなさり方は、いたずらっぽく人の意表をつくものであることが多かったが、縷説なざるのうかがえば、深慮に基づく、多方面への配慮の行き届いた現実性の高いものであることが理解された。

先生は、1972年から京都地方最低賃金委員会委員となられ、いわゆる京都方式をうちだされたことはよく知られていることであるが、これなど、こうした先生らしさの発揮された社会への貢献の一つといえる。

また、先生は、留学生教育の重要性に相当早くから着目されておられ、学部留学生教育方法検討委員会を設置して、みずから代表者となられ、調査研究を二次にわたり指導された。第一次調査は全国の大学の教員・留学生を対象とするもので、第二次調査はASEAN からの留学生の追跡調査であったが、この調査結果は、チューター制度の導入や経済学部が私費留学生に門戸を開き留学生特別試験を実施するようになったことなどの具体的改善をもたらしている。今日の多数にのぼる経済学部の留学生の教育・研究指導について考えるとき、先生の貢献は忘れることのできないものとなっている。

しかし、何をなさるのも早く、いつも急いでおられた先生は、私達が抱いていた回復なさるとの確信のような期待を裏切ってあわただしく他界してしまわれた。先生の御指導・御助言をうけることができなくなってはや1年以上が経ってみると、先生の大きさ、配慮の深さがますます強く感じられるようになっている。

あの暑い研究室で、また赤煉瓦の部屋で、イギリス労働組合主義の研究をまさに完成させようとしておられた先生と、ちょうど労使関係への見方が大きく変わる時期に、労働市場の変貌を議論させていただいた時のような興奮を先生の御指導の下に味わうことはもはやできなくなってしまった。追懐の情にたえない。